

# 輸出事業計画

## ※申請者名：株式会社日本農業、品目：りんご

### 1. 輸出における現状と課題

#### 【現状】

- 令和7年の国産りんごの輸出額は約143億円と、日本の青果物の中で最も大きな輸出額を誇り、国の輸出拡大戦略によって最も重要な品目の一つである。
- りんご産業は青森県における一大産業であり、令和6年の生産量は370,500トンと全国1位となっている。一方で農家の高齢化は進み続け、日本全国で毎年100haの結果樹面積が減少しており、将来的なりんご産業の衰退が懸念される状況にある。
- 株式会社日本農業としては平成28年より、東南アジア各国に向けりんご輸出を行っており、令和6年産では2,578百万円まで規模を拡大してきた。

#### 【課題】

- **生産方法**  
生産量の減少に伴い、将来的な仕入れ値の高騰が見込まれる。他のりんご輸出国と比較し非効率な生産方法が主流となっているため価格競争力が低い。
- **酷暑への対応**  
夏の酷暑による色づきの悪化や病害虫の増加により輸出向けりんごの確保が難しくなる可能性がある。
- **生産者の作業負担**  
海外では選果機を持つ流通業者が行う一般的な粗選果を日本では生産者が行っており、品質、生産量の向上におけるボトルネックとなっている。また、日本では軽く、取り扱いの容易なプラスチックコンテナではなく、木箱による流通が主流であり、生産者が納品に至るまでに過大な作業負担が発生している。
- **流通過程で生じるロスや品質低下**  
荷姿・振動に起因する損傷や、輸送環境から生じる品質劣化などは、海外のインポーターよりクレームが生じるケースが存在する。

### 2. 輸出事業計画の取組内容

#### 【生産方法】

- **耕作放棄地を活用した作付面積の拡大**  
減少が見込まれるりんご供給量への対策の一つとして耕作放棄地の再生による作付け面積の拡大に取り組む。
- **生産方法の転換**  
従来の生産方法と比較し3倍の反収を実現できる高密度植栽培という技術を活用し、生産原価を低減することで価格競争力を高めていく。当社のみならず、青森県のプロデューサーに対しても高密度植栽培を普及する活動を行う。

#### 【酷暑への対応】

- **酷暑に対応した栽培技術の検証**  
夏の酷暑によって増加した病害虫への対策として交信かく乱用性フェロモン剤を用い、害虫の発生リスクの低減が可能であるか検証を行う。

#### 【生産者の作業負担】

- **海外選果機の導入**  
日本では当社が初の導入となる海外選果機を用い、これまでの3倍の処理能力を実現する。これにより中間コストを削減するのみでなく、生産者の粗選果の作業を不要とすることでキズなど品質低下の要因を減らし品質向上を図る。
- **運搬・集荷における負担の低減**  
従来の木箱からプラスチックコンテナへ運搬時の容器を変更し、運搬や積み上げの作業負担の低減を実現する。また、運送業者と連携し集荷サービスを確立することで収穫期の生産者の負担を取り除き、りんごの生産に注力できる環境を整えることで品質向上を図る。

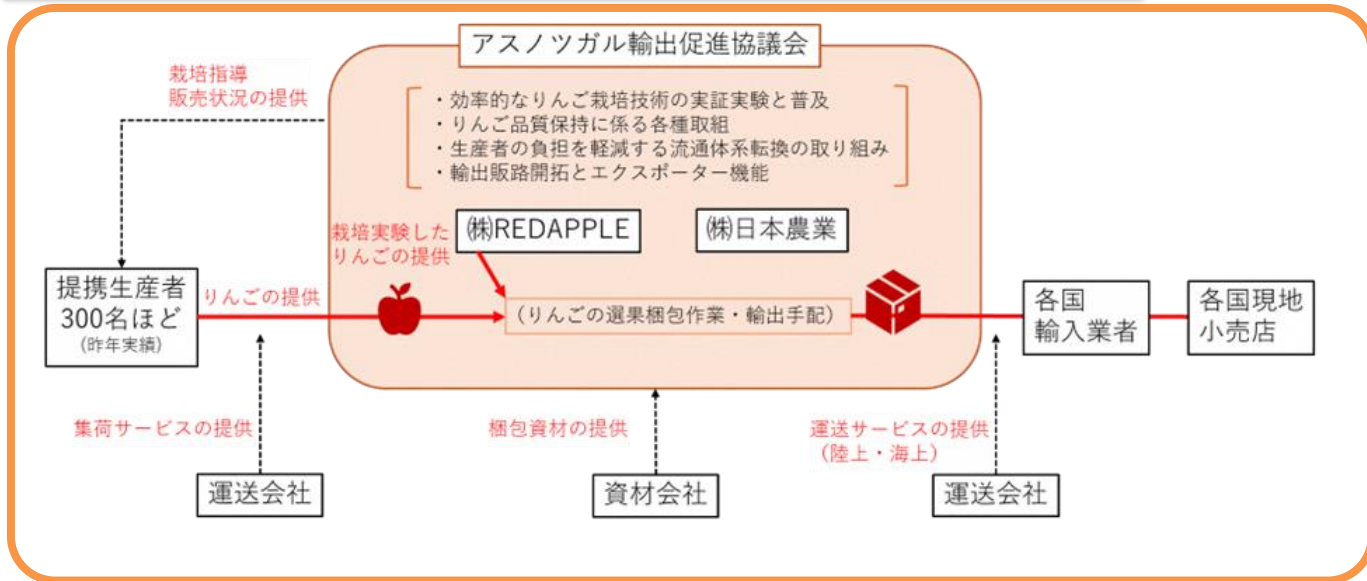
#### 【流通過程で生じるロスや品質低下】

- **ダイナミックCA冷蔵庫でのりんご保管**  
従来のCA冷蔵庫以上の品質保持能力を持つダイナミックCA冷蔵庫の導入により輸出適期により高品質なりんごの輸出を実現する。
- **陸上輸送の極小化**  
八戸港よりRORO船を用いることで品質低下の原因となる陸上輸送の揺れを排し、品質保持を実現する。

# 輸出事業計画

## ※申請者名：株式会社日本農業、品目：りんご

### 3. 輸出事業計画の実証と見直しを行うためのPDCA実施体制



### 4. 輸出目標額

品目		現状 (令和3年度)	目標 (令和8年度)
りんご	輸出量(t)	1,601	4,700
	輸出額(千円)	769,846	2,500,000
	輸出先国	台湾、香港、マレーシア、フィリピン、 タイ、ベトナム、インドネシア、 シンガポール	台湾、香港、マレーシア、フィリピン、 タイ、ベトナム、インドネシア
	取扱量(t)	2,999	15,000